

第八回市民学校②

私の歩んだ人生

高知グランドホテル社長 岩崎 令子氏

生まれてから死ぬまでの人生をお互いに人間は、何とか幸せに生きようと思います。

子供が生まれたとき母親は、よそよそもきれいで、利口な子であることを願い、人よりも幸せに生きてほしいと子供を育てていくものです。

しかし私は、親の最高のプレゼントは五体満足で自分で考えることのできることで、と今しみじみと感じて、親に感謝しています。

よく注意もされました。若いころはいちいち注意しなくてもいい



講演を聴く受講生

じゃないかと思つたものですが、いかにその注意が生きているか、有り難いことがわかります。

そのように思つて子供を育てていきましたが、三歳のとき一晩の熱病で心身ともに障害を受けてしまいました。夫も戦争で失い、次男も病気で失つた私は「いつ死のう

か、いつ死のうか」と考えていましたが、死ぬということはよっぽどでなければできません。

そして、「やっぱり生きていかなくてはならない。この子のために生きなければならぬ」と思つたときに、親としての考え方が変わつてきたのです。それまでは、

こういう子供になつて世間に対して恥ずかしい、自分がしつかりと生きていかなければならないと気づいたとき、初めて親としての使命感、責任感が生まれてきました。

私も、最初はこういう子を持つて恥ずかしいと思つたりもしました。しかし、世の中の人がこうしたことに理解がなかったがために、恥ずかしい思いをしたのだと思う

のです。ほんとうに恥ずかしいことは、五体満足で知恵も人並み以上の人が、自分の欲望のために反社会的なことをすることではないでしょうか。そうした子供を持つことが親にとつて恥ずかしいのかもしれない。

障害という宿命のなかで、いっしょうけんめいに生きていた人たちは、神様みたいな心のきれいな人で、こうした人を授かったということは、その人がそれだけの何かをやりなさいという、神様が授けた責任じゃないでしょうか。だからこそ、みんな手をつなぎ合つて見守つていかなければ、と思うのです。

私も、女手一つでつらい思いもしてきました。けれど、今考えてみると、成功した人が一日三十時間もらっているわけではありせん。みんな平等に一日二十四時間をもらっているのです。この二十四時間をどのように使うかで、その人が決まるのです。人並みのことをして、人並み以上になれるわけがありません。ましてや、女一

人でそのうえ病を患つていては、人の三倍以上のことをしなければなりません。しかし、そうしてがんばつたおかげで、子供といっしょにやつてくることができ、旅館を開くこともできました。

旅館を始めるにあつて、お客様をお金のように大切にしよう、そしてお客様にまた来てもらえるようにと、努力してきました。

三遊亭金馬師匠に「自分がつかろうとどうしようと、お客には関係ないんだから、いつも笑いやらんといかんよ。そういう顔を作んなさい」と教わり、なるほどそうだと、とあちこち鏡を置いて女中さんたちにいつも注意するように、そしていっしょにいい顔を作つてそれを習慣にしようとしてきました。

習慣は人が作るものです。しかしそれにしぼられて抜けきれないと、世の中はぐるぐる変わつていきますから取り残されてしまします。いつも前向きな姿勢で考えて、いい習慣は残して、また古い習慣をいものに変えていかななくてはなりません。

この前向きな姿勢が大事なのです。意味のない人生はつまらないものです。人間が生きていくうえで、目標がなかったら何のために生きているのかわかりません。長い人生、目的意識を持つているこ

とが必要で、それに向かつて計画を築き、結果を出すために行動に移していくのです。

年は取つても何かの目標を持つて生きていかなければ、値打ちのある時間は過ぎません。時間を大事に使つて価値感のあることをしなければ、値打ちのある仕事はできないのです。自分が意識していないといけない。価値感のある時間は意識の連続なんです。

「まだ五分ある」と「もう五分しかない」、「まだ」と「もう」の意識の違いで、同じ五分が全く別なものになつてしまうのです。

自分の歩んできた道、これは変えることはできなくても、歩んでいく道は作っていくことができます。人生は有限ですからそれまでを価値のある、幸せな生き方にしていきたいものです。

幸せと不幸せは隣り合わせ。人生つらいことばかりではありせん。自分で幸せを作り上げましょう。

第八回市民学校が、五月十一日から三十日まで五回にわたつて大篠公民館で開かれました。

広報では、都合により受講できなかった方のために、講演の内容を紹介します。

とが必要で、それに向かつて計画を築き、結果を出すために行動に移していくのです。